

機関名	早稲田大学	機関番号	32689	拠点番号	D10
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) KAMATA KAORU (氏名) 鎌田 薫				
2. 申請分野 (該当するものに0印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> <b>D&lt;人文科学&gt;</b> E<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	演劇・映像の国際的教育研究拠点 International Institute for Education and Research in Theatre and Film Arts				
研究分野及びキーワード	<研究分野 文学 >(芸術諸学)(演劇学)(日本文学)(中国文学)(英米文学)				
4. 専攻等名	演劇博物館・文学研究科人文科学専攻				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者	計 24 名 ※他の大学等と連携した取組の場合：拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [ 100% ]				
ふりがなくローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー)					
TAKEMOTO MIKIO 竹本 幹夫 (63)	演劇博物館・館長、文学研究科人文科学専攻 日本語日本文学コース・教授	日本演劇、 博士(文学)	研究計画全体の統括と古典演劇研究(能楽)		
AKIIBA HIROKAZU 秋葉 裕一 (64)	演劇博物館・副館長、理工学術院・教授	日独比較演劇、 文学修士	統括補佐と西洋演劇研究(ドイツ・日本の現代演劇)		
OKAZAKI YUMI 岡崎 由美 (53)	文学研究科人文科学専攻 中国語中国文学コ ース・教授	中国演劇、 文学修士	東洋演劇研究(中国古典演劇)		
OKAMURO M J N A K O 岡室 美奈子 (53)	文学研究科人文科学専攻 表象メディア論コ ース・教授	アイルランド演劇、 Ph.D	西洋演劇研究(アイルランド演劇)		
KOMATSU HIROSHI 小松 弘 (56)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・教授	映画史、 修士(芸術学)	映画史研究(映画史資料)		
TAKEDA Kiyoshi 武田 潔 (57)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・教授	映画理論、 博士(言語学)	映画理論研究(記号学的観点)		
HIRABAYASHI NORIKAZU 平林 宣和 (46)	政治経済学術院・准教授	中国演劇史、 文学修士	東洋演劇研究(京劇等中国古典・近代演劇)		
FUJII SHINTARO 藤井 慎太郎 (40)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・教授	仏語圏舞台芸術・文化 政策、修士(学術)	芸術文化環境研究(フランス語圏の舞台芸術・文化政策)		
MARUMOTO TAKASHI 丸本 隆 (67)	法学学術院・教授	ドイツ演劇、 文学修士	西洋演劇研究(オペラ)		
ODASHIMA KOSHI 小田島 恒志 (50)	文学研究科人文科学専攻 英文学コース・教 授	英米演劇、 文学修士	西洋演劇研究(英米日の現代演劇および文化芸術・劇場)		
KATZAWA HAJIME 貝澤 哉 (49)	文学研究科人文科学専攻 ロシア語ロシア文 化コース・教授	ロシア演劇、 文学修士	西洋演劇研究(ロシア演劇)		
SAWADA KEIJI 澤田 敬司 (44)	法学学術院・教授	オーストラリア演劇、 Ph.D	西洋演劇研究(ポストコロニアル演劇と演劇の文化交流)		
SAKAUCHI FUTOSHI 坂内 太 (46)	文学研究科人文科学専攻 表象・メディア論コ ース・准教授	アイルランド演劇、 Ph.D	西洋演劇研究(アイルランド演劇)		
TOEDA HIROKAZU 十重田 裕一 (47)	文学研究科人文科学専攻 日本語日本文学コ ース・教授	日本文学・映像文 化論、博士(文学)	映画史研究(映像文化論)		
HASE MASATO 長谷 正人 (52)	文学研究科人文科学専攻 表象・メディア論コ ース・教授	映画学、 修士(文学)	映画理論研究(社会学的観点)		
FUJII JINSHI 藤井 仁子 (39)	文学学術院・准教授	映画学、修士(人間 ・環境学)	映画史研究(映画史資料)		
FUYUKI HIROMI 冬木 ひろみ (56)	文学研究科人文科学専攻 英文学コース・教 授	英国演劇、文学修 士	西洋演劇研究(エリザベス朝演劇を中心とする英国演劇)		
MIKAMI HIROKO 三神 弘子 (57)	国際学術院・教授(平成21年4月1日:国際教養 学術院より名称変更)	アイルランド演劇、 Ph.D	西洋演劇研究(アイルランド演劇)		
MIZUTANI HACHIYA 水谷 八也 (58)	文学研究科人文科学専攻 英文学コース・教 授	英米演劇、 文学修士	西洋演劇研究(英米演劇)		
MOTOYAMA TETSUHIITO 本山 哲人 (42)	法学学術院・准教授	英国演劇、 博士(学術)	西洋演劇研究(エリザベス朝演劇を中心とする英国演劇)		
YAGI MAOKO 八木 斉子 (46)	政治経済学術院・教授	英国演劇・Ph.D	西洋演劇研究(イギリスを中心とする英語圏演劇)		
WADA OSAMU 和田 修 (48)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・准教授	日本演劇、 文学修士	古典演劇研究(日本演劇および民俗芸能)		
KODAMA RYUICHI 児玉 竜一 (44)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・教授(平成22年4月1日就任)	日本演劇、 文学修士	日本演劇研究(近世演劇)		
SUZUKI SHO 鈴木 晶 (59)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・客員教授、演劇博物館招聘研究員(平成23年 4月1日就任)	舞踊史、 文学修士	舞踊研究(舞踊史、身体表象論)		
GUNTER ZOBEL ギュンター・ツォーベル (73)	政治経済学術院・教授(平成21年3月31 日退任)	日独比較演劇、 Ph.D	古典演劇研究(ドイツおよび日本の全時代こわたる比較演劇)		
UCHIYAMA MJKIKO 内山 美樹子 (72)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・教授(平成22年3月31日退任)	日本演劇、 文学博士	古典演劇研究(浄瑠璃)		
KATAOKA YASUKO 片岡 康子 (71)	文学研究科人文科学専攻 演劇映像学コース ・客員教授(非常勤扱い)、演劇博物館客員研究 員(平成23年3月31日退任)	舞踊学、 修士(体育学)	舞踊研究(舞踊学)		
	* 鈴木晶教授以外の23名は演劇博物館兼任 研究員。				

機関（連携先機関）名	早稲田大学
拠点のプログラム名称	演劇・映像の国際的教育研究拠点
中核となる専攻等名	演劇博物館
事業推進担当者	（拠点リーダー） 竹本 幹夫 教授 外23名
<p>【拠点形成の目的】</p> <p>演劇研究と映像研究とを統合した、大規模な国際的演劇教育研究拠点を構築する。これにより映画をも含む広汎な分野において、世界の文化をリードする人材を育成することを目指す。</p> <p>演劇博物館では21世紀COEの成果を踏まえ、学内の演劇・映像研究者を結集したグローバルCOE教育研究拠点を構築した。演劇博物館は世界で唯一、世界演劇全体に対する視野を備えた演劇総合博物館であり、その豊富な研究資源を駆使した、ダイナミックな教育研究を実施した。</p> <p>演劇博物館は世界の研究者と相互交流を重ね、すでに世界的な研究機関として認知されてもいる。中国や欧米の演劇研究者にとっては、演劇博物館はアジアにおける世界の演劇研究情報の十字路口であり、またもっとも巨大な発信基地でもある。この5年間を通じて、各国の演劇研究者・関係者が、自国演劇の紹介や演劇研究の成果発表の場として、演劇博物館を目指して参集し、ここを目指す留学生の数も数倍した。また箇所間の学術交流協定を通じて、相互に研究拠点を構築し、学生交流や研究交流を行っている海外大学も数多く存在する。複数の海外拠点と協同することにより、いまや世界的な規模で演劇研究が発展する基盤が構築された。演劇研究を目指す優秀な若手研究者を、本拠点に国籍・学籍の別なく集めることにより、世界の演劇映像研究をリードする人材を育成することを目的として、グローバルCOE事業「演劇・映像の国際的教育研究拠点」を計画したが、その目的は十二分に達成されたと確信する。</p> <p>これまでの具体的な実績の一例を挙げれば、日本古典演劇研究では中国およびヨーロッパ中世・近世演劇研究との共同研究構想を実現し、さらに映像研究との共同により世界最古の文楽と能の映像を発見した。また西洋演劇理論の研究では、日本発信のベケット研究をはじめとする画期的な研究成果が、世界の学界に影響を与えつつある。平成20年度刊行のSamuel Beckett Today/Aujourd'hui 19で事業推進担当者の岡室美奈子教授が編集委員長を務め、欧米各国の編集委員と協力しつつ指導的な役割を演じたことは特筆に値する。もちろん同誌にはCOE研究生であった若手研究者が複数執筆の榮に浴してもいる。岡室教授は国際ベケット基金やJournal of Beckett Studiesの顧問に就任するなど、国際的な社会活動にも貢献し、また毎年複数の国際学会に若手研究者を送り出すなど、拠点中でも著しい成果を上げた。東洋演劇とくに中国演劇研究については、近現代の演劇史に関する研究と、関連する資料収集活動の成果が、中国の学界からも注目されている。加えて古典演劇についての研究も開始された。映像関係資料の収集の成果により、映画史・映画理論の教育研究拠点としての基盤も整い、中国・韓国・欧米諸国との研究交流も増大した。</p> <p>今回新たに提案した演劇と映像との統合的研究も順調に行われつつある。映画研究の側からの演劇と映像との融合研究をテーマとするシンポジウムを拠点発足時より毎年実施しており、また平成21年末に世間を賑わせたパリのアルベール・カアン博物館で現存最古の文楽映像フィルム、同じく23年春には最古の能楽フィルムを、発見・考証・紹介したことは、映像学と古典演劇学との理想的な共同研究の一例である。すなわち本拠点においては、演劇と共に映画の理論・歴史についても研究の充実が著しく、名実ともに演劇・映像の総合的教育研究拠点が形成されたのである。</p> <p>【拠点形成計画及び達成状況の概要】</p> <p>本拠点構築のために、研究分野を下記のごとくに分割し、分野横断的な研究を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本演劇研究（能・狂言・文楽・歌舞伎・近現代演劇の諸分野を包括的に研究）</li> <li>・東洋演劇研究（とくに中国演劇を中心に研究）</li> <li>・西洋演劇研究（とくに演劇理論・演劇史、及び日本を含む世界の現代演劇を研究）</li> <li>・舞踊研究（東西の舞踊理論を研究）</li> <li>・映像研究（映画史・映画理論を研究）</li> <li>・芸術文化環境研究（劇場マネジメント・文化政策を研究）</li> </ul> <p>上記の6分野をコース化し、毎年本学大学院のみならず世界の大学院博士後期課程学生を公募し、グローバルCOE研究生に採用した。採用者は本属指導教授の承認を経て、早稲田大学大学院在籍学生と同等の研究環境を準備し、各研究コースの研究活動に参加することを通じて、それぞれの研究キャリアを積み重ね、学位論文執筆や研究機関への就職を初めとする社会貢献を果たしつつある。平成24年度初頭の時点で、延べ数で全研究生の一割以上に当たる40名が専任として全国の研究機関に奉職している。研究生には年度ごとの成果の発表を促し、紀要への査読論文の掲載、国際的な調査活動への参加、国際学会での発表の機会の提供をはじめ、あらゆる支援を行った。また確実な学位論文執筆を促すべく、定期的に学位論文完成に向けてのゼミを開催し、各人の作業の進捗状況を把握するように努めて来た。なお優秀な研究生の中から2年任期の研究助手を15名選抜して任用した。毎年学位論文提出予定年度を迎えた研究生10名を限り、1年間の任期でRAとして雇用、月額16万円ほどの給与を支払うことにより、生活面の不安を持たずに学位論文執筆に専念できる環境を整えた。支援を与えた年度から起算して2年以内に学位論文を提出することとなっており、授与学位数は平成23年度末の段階で67件に達し、同24年7月迄に目標の70件を超えた。</p> <p>さらに各研究を横断するための比較演劇研究を積極的に推進した。例えば各国の研究者と、日本古典演劇の舞台史研究、中国古代舞台研究、西洋バロック演劇舞台復元研究を、それぞれの舞台遺構の調査を通じた国際共同研究として行った。また平成21年・22年の両度にわたり、18世紀チェスキークルムロフ城の城主のシュヴァルツェンベルク家の蔵書調査・撮影を行い、シェヴォイ市資料など周辺地域の資料群についても、所在調査を行った。</p>	

## 6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

## ① 演劇と映画との融合研究の実施

毎年両分野の融合をテーマとする大規模国際研究集会を開催した。伝統演劇に関しても、映画化された事例の研究を行う中で、最古の文楽フィルム、能楽フィルムの発見につながった。この二つの発見は、いずれも現代の能や文楽の演技の起源を考察する際の有力な資料であるばかりか、それらの撮影関連書誌の考証過程で、近代における伝統演劇の歴史研究をも充実させる結果となった。なお能楽フィルムと共に発見された日本舞踊フィルムも、ほぼ考証を完了したが、それによれば、現存では2番目に古い内容であり、日本舞踊研究にとっても貴重な資料である。

## ② パリにおける日仏独共同の国際シンポジウムの実施

日本演劇・西洋演劇・舞踊・芸術文化環境学の各コース共同事業として、平成21年、「演劇・舞踊・芸術環境一日仏交流の20世紀」をパリ日本館等で3日間にわたり開催した。日本はもちろん、フランス・ドイツ・イタリア等の研究者が参集して、川上貞奴から平田オリザにいたる、クローデル、バロー、観世寿夫等々に関する研究をも交えた超域的な研究集会となった。

## ③ 毎年行われた拠点主催の国際研究集会11件

上記①②に言及したものを含み、拠点主催で行った大規模国際研究集会は11件あった。日中戦争記における中国の映画・演劇事情の研究、中近世における劇場構造の国際比較研究などがその他の主要なテーマであった。

## ④ 国際研究集会「60年代演劇再考」の成功

平成20年に開催の「60年代演劇再考」は、ニューヨークで起こりあつたという間に全世界に広まった小劇場演劇が、日本でいかに展開したかを論じる。佐藤信・唐十郎・蜷川幸雄・別役実を初めとする当時の日本の小劇場の領袖たちに、ニューヨーク小劇場の出発点ラ・ママ劇場主宰のエレン・スチュワート、扇田昭彦、大笹吉雄、デイヴィッド・グッドマンらの演劇評論家や翻訳家、平田オリザら80年代以降の演劇の旗手たちをも交えたシンポジウムで、本拠点でも最大のイベントとなった。若手研究者が現代演劇とは何かを考える最大の機会ともなった。

## ⑤ 中国における初期映画フィルム発掘事業の先駆性

東洋演劇研究コースで日中戦争時における上海の映画界の日中共同研究が進展する傍ら、映像研究コースでは東洋演劇コースと共同で中国東北地区を中心とする戦前映画フィルムの捜索・収集を行い、多くの貴重な映画フィルムを入手、分析・考証した。中国東北地方はこうした映画資料の宝庫であるが、それを知らしめたこと自体にも非常に意義のある活動であった。

## ⑥ 研究生による海外での学会発表46件

海外・国内の国際学会や全国大会で発表する研究生に対し、旅費・滞在費の支援（1人年間1回、未経験者優先、20万円上限）を行った。海外調査に対しても上限25万円の支援を行った。

## ⑦ 若手研究者による単行本発行

大学からの支援経費（年間1千万円）の一部を研究生による単行本刊行費用に充当した。研究生の提出した学位論文の内、拠点内の成果発表会で発表してとくに優秀と認められたものを事業推進担当者会議に推薦し、その中から若干数を選抜、利害相反のない2名の査読委員をそれぞれ委嘱し、匿名による査読を依頼した。その結果を受けて事業推進担当者会議で最終選抜を行い、5年通算で9冊を刊行した。なお拠点の支援を受けない若手単行本刊行もあった。

## ⑧ 事業推進担当者と若手研究者との共編の論文集

同じく支援経費により、事業推進担当者を監修とする論文集を10点、注目すべき海外学術書の翻訳2点、事典・報告書各1点を事業推進担当者会議で選抜し、刊行した。

## ⑨ 各コースごとに恒常的に行われた研究会と海外からの招聘講師による指導・講演

## ⑩ 演劇専門家養成語学ゼミや博論ゼミ、博論成果発表会を通じての徹底した論文指導

上記2件については、すでに述べたので省説する。

## ⑪ 査読付き紀要『演劇映像学』『報告集』の恒常的刊行

年刊で初年度3分冊、第2年度から4分冊、第4年度から5分冊の紀要、平成23年度分までの年刊2分冊の報告集を刊行した。

## ⑫ 国立劇場・国立文化財研究所等との連携

国立の研究機関や国外研究機関との共同研究事業を実施・支援した。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	早稲田大学	拠点番号	D10
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	演劇・映像の国際的教育研究拠点		
中核となる専攻等名	演劇博物館		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)竹本 幹夫		外 23 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、本拠点形成計画は大学の将来構想に明確に位置付けられていることに加え、自己資金を財源とするグローバルCOE採択拠点に対する支援経費の措置や拠点に参加する優秀な外国人留学生への授業料減免などの取組がみられた。

拠点形成全体については、本拠点の中核となる演劇博物館は、膨大な演劇資料とその公開、データベース化によって、すでに国内外で高い評価を得てきたが、今回の事業によってユニークな国際的教育研究拠点として発展し、更に高い国際的な位置付けを得られたと評価できる。拠点としての運営体制とマネージメントもよく機能し、拠点に参画する研究生（自大学院在籍者、他大学院在籍者、PD）への研究指導や外部研究機関との研究提携など、十全な運営がなされたと判断できる。

人材育成面については、研究生の学位取得者70名という当初目標をクリアし、40名を超える大学等の研究機関の専任スタッフを輩出するなどの成果をあげることができた。ただし、若手研究者が特定分野に集中しがちな点などへの対応はまだ不十分であり、バランスのとれた拠点形成の努力と工夫が期待される。

研究活動面については、演劇と映像の両分野による共同研究を心がけ、数多く開催された国際シンポジウムでも常に両者の融合を目指すテーマを掲げて、国際的な評価を受けることができた。また、国際研究集会「60年代演劇再考」は多数の参加者を得て、大きな成功を収めた。そうした諸活動の中で、国際的に研究成果を発信できる若手研究者を育て、また、研究内容面では、最古の文楽・能楽フィルムや現存第二番目に古い日本舞踊フィルムの発見・研究等々、多くの優れた研究成果をあげることができた。

これらの点から本拠点は、演劇・映像研究の教育研究拠点として日本を代表し、国際的にも高い位置付けを与えられたと評価できる。

今後の展望については、わが国の演劇文化において卓越した研究伝統を有する大学として、演劇博物館をベースとしたユニークな国際的教育研究拠点が一層高く飛翔していくことが期待されている。